

『義経記』にみる義経伝説の魅力

三十四回生上山育代

源義経を取り上げている文献の多さは、彼がいかに人々の耳目を集めるスターであったかの証明である。特に、歌舞・演劇の舞台において、彼を扱った演目が喜ばれ、文字通り花形であることは周知の事実である。『義経記』は、その彼の一代記であり、歴史から切り離された英雄物語として、『平家物語』を中心とする一連の軍記物とは一線を画す。そして、いわゆる「判官最良」の意識のもとに、歌舞伎や浄瑠璃に与えた影響は大きい。私の『義経記』に対する考察は、この「判官最良」の語から始まった。正確には、日本人の典型的感情を高めから「安っぽい群集心理」と蔑笑してしまう現代の風潮への反発からである。私の着眼点はこの「判官最良」の語そのものではない。こういう語を生み出すまでに至った大量の同情・興味・関心である。だが、「これだから、「判官最良」は……」と苦笑せざるを得ないくらいに、多くの人々に支持された義経の魅力なのである。加えて『義経記』は、義経伝説を扱っている文献の最大公約数的存在と言えらると思われが、彼の

人生における最も華々しい時期、つまり平氏との合戦での武功はほんの数行見られるだけでほとんど語られていない。その活躍は、重要かつ劇的な合戦の中心人物として、『平家物語』に詳かであるが、関係を密にしながらも、最早、『義経記』の義経は、『平家物語』の彼とは別個の人間だ。そうして、この『義経記』に描かれている義経像が、後世の謡曲・狂言・舞曲・御伽草子等に受け継がれ、「判官最良」を広く普く育んでいく。よって、私は『義経記』における義経伝説の魅力探究と称して、ひたすら肯定的な姿勢で読み進めていくことを、基本的指標にすえたのである。

私がこの考察で最も枚数を費したのは、『義経記』における登場人物観である。特に、時として義経の影もかすむほどの、強いキャラクターを持った脇役たちの丹念な描かれ方には、目をみはるものがある。彼を取り巻く人々の逸話・伝承を含めての義経伝説である。『義経記』では、そうした、義経を支え、愛し、或いは恨み続けた後の世の有名人们が、実に生き活きと動いている。私は彼らの逸話

を、虎の威に与った偶然の所産だと思わない。彼らの一人一人自体が、伝説を持ち得る強いキャラクターを持っているのである。そして、これらの強烈な個性を自分の運命に引張り込んだ義経は、更に英雄としての威光を彌増すことになる。このことは、ひいては『義経記』全体の魅力につながると思われる。義経の一人舞台に終始せず、脇役たちの折節の見せ場によって、物語を受け手に飽きさせない。脇役の個性が明確に描かれていることは、受け手の想像力の手助けともなり、更に深い理解を得ることとなる。この視野の奥行き・拡大が、後に能や浄瑠璃・歌舞伎など、舞台ものの材料にとり入れられやすい好因の一つにはならなかったであろうか。『義経記』自体、よくできた大衆娯楽だったと思われる。

私は、多くの脇役たちを、とりあえず三つに分類した。そして、彼らに盛り立てられて物語の主人に輝く義経自身の魅力を引き出したいと考える。

第一に、義経を支える味方の人々である。義経は、山賊出身の伊勢三郎義盛や、共に義経の身代わりになって果てた佐藤継信・忠信兄弟、或いは喜三太・江田源佐というように多くの義臣に恵まれている。彼らの死にゆく場面などは深い哀れを誘われると思うが、彼らはまだ、義経の一家来としてしか物語に存在できない観がある。味方の郎党の中で、登場頻度、活躍ともに群を抜いているのが、武蔵坊弁慶だ。彼の存在なしに『義経記』は語れないと言っても過言ではないだろう。同時に、弁慶の姿の見えない義経と

いうのも、何ともバランスの悪いものなのである。そのことは後で触れることにして、まず、『義経記』における弁慶の取り扱われ方である。『義経記』では、生い立ち、荒くれ法師時代から五条天神参りの義経との運命的な出会いが巻三に「弁慶記」と後に呼ばれる程に詳しく語られている他、全巻を通じて、弁慶の活躍が異常に強調されている。『平家物語』にもこの弁慶の名は見い出すことができるが、『義経記』の比ではない。そして、この弁慶なる家来は、その誕生から死まで、どこか常人離れた霧困気を匂わせている。弁慶は、人知を越えた「異形」の者として生まれる。成長後も、腕力・骨格共に並はずれたスケールであったばかりか、性格的にも無軌道・無鉄砲であったが故に、義経に出会うまでは、誰からも持て余され、遠巻きに目されるだけだった。ところが、義経を主君に仕え始めてからは、エネルギー溢れる豪傑となる。しかも、彼は主君に影のようにつき従うのではなく、叱りもし、窘めもして、義経を始終かまっている。かつての、短気で直情径行、手のつけられない暴れ者からのこの変化には、義経の存在が一役も二段もかかっていると思われる。主人に対し、あたかも肩を並べる患友同志か兄弟のような振舞いが、『義経記』における弁慶の醍醐味であろう。「こいつは俺が守ってやらなきゃ」という気概すら感じる。つまり、弁慶の義経に対する主君観は、慈愛に近い忠義なのだ。荒くれ弁慶は、義経を得て救われたのであり、その意味で、義経はまさに掌中の珠だったのである。「弁慶の立往生」として有名な最期も、義

経の前に立ちはだかるようにして矢を受け、死して尚倒れなかつた弁慶の氣迫に息を呑む。更に、小兵の主人義経の背後に常にある大男弁慶という、この二人の容貌のコントラストの妙である。女性と見紛うほどの美しい義経に、まるで守護神の如くに配された弁慶は、その視覚的バランスのみならず、義経に執拗につきまとう悲運の哀れにめりはりをつけていると思われるのだ。加えて、主従関係にこうした魅力を持つことは、戦記物としての読み方に役立つところがあるのは、言わずもがなのことであろう。

第二には、義経に関わる女性たちである。『義経記』を「常に義経を愛する人々とその犠牲の上に生きる義経をいかななく描く」という見方がある。その人生の始まりにおける、母・常盤御前の犠牲の逸話は有名であるが、私は特に、義経の正妻と愛妾二人について考えた。まず、愛妾とは、言うまでもなく静御前である。静が頼朝に請われて彼の前で舞ってみせる八幡宮の場面は、『義経記』でも指折りの名場面だと思われる。目の前には義経を追いつめた頼朝ばかりか、讒言によって義経を陥れた張本人の梶原景時も鎮座している。そうしてありがたい歌声を拝聴しようとする多勢が息を呑んでいるところへ、

しづやしづ賤のをだまき繰り返し昔を今になすよしも
がな

吉野山嶺の白雪踏み分けて入りにし人の跡ぞ恋しきと詠うのである。本来ならば、そう詠わずにはいられなかつた静の悲しい恋心に袖を拭うところであるが、同時に、

その潔さに胸のすく思いも禁じえない。静の清冽な人間像と共に、先の二首に込められた静の諦観は、また殊更に義経の栄花の儚さを人々にかきたているような気がする。

この意志堅固な静とちょうど好対称なのが、義経の正妻、久我大臣の姫君である。静の、他を圧する毅然とした美しさ、華やかさにひき比べ、この姫君の魅力は、なやかな言動、ひたすらけなげないじらしさにあると思われる。義経について行くしかないという信念のもとに、つらい北国落ちの道中を耐え、義経の死に伴えた只一人の女性である。そう思うと、このなよ竹のような姫君にも、ある種の強さを認めてもよいのではないだろうか。そして特に彼女がいたおかげで、西海漂泊以来、しばしば優柔不断になりがちだった義経が奮起することとなり、少からず頼しく見えた。

第三は、敵役に位置する人間たちだ。と言っても、義経伝説においてその役を一手に引き受けているのは梶原景時で、『義経記』においても、その追及の手が多少ゆるめられていても、彼が一番の憎まれ役には違いない。ただ、景時という悪役が存在することで、人々の義経への同情も高まるのであり、「判官最肩」の構図には欠くことのできな

い役回りである。義経に対する同情が強まれば強まるほど、狡猾な景時像も膨らんでいったのだ。義経伝説が成長していくに従い、「判官最肩」の人々によって、梶原景時という人物も、誰もがごぞって心の底から憎悪するに足る悪役へ練り上げられていくのである。また、景時の数々の讒言を鵜呑みにしてしまう頼朝も頼朝である。私は『義経記』

の登場人物観を論ずるにあたり、史実に残る彼らの人間像と比較してあれこれ言及することは極力避けようと考えた。あくまでも、『義経記』という歴史物語にみる人物観に留めるべきである。他の人物観を思索している時はそれも容易である。ところが歴史の方を忘れてしまって没頭する始末だった。が、頼朝ともなるとそうはいかない。静の子を生まれる前に殺してしまうよう命令する冷酷無比さには、いくら軍記物が勝者が敗者に対し厳しかつたことを書いたとは言え、目に余る思慮の無さである。思わず、そんなことから源家の將軍はたったの三代で、しかも血を血で洗うような悲惨な終わり方しかできなかつたんだと言いたくなる。戦乱に明け暮れた中世に生きた人々の方が、時の権力者を見る目は冷静で、ある程度距離を保てる寛容さがあつたのかもたしれない。或いは厳然たる封建社会で、口をつぐまざるをえなかつたのかもたしれない。いずれにしろ、判官鼻肩の人々は、その非難の目を専ら梶原のみに向け続けた。私としては、権力者ゆえの孤独・悲哀にはあえて目をつぶり、実の弟をかかむ追いつめた頼朝に、憤懣やるかたない思いを抑えきれないものである。

最後は義経自身についてだ。『義経記』における義経は、平家との合戦で名を馳せた稀有の軍略家ではない、と言うより、それで有名になつた義経の没落譚であるから、優れた武将であることを読者が物語を読む前に解していることは大前提であつたかもしれない。とにかく、『義経記』の義経は、勇壮というイメージからは程遠い。そういう場面

もないことはないが、頻度の差である。『義経記』の義経は風雅を解する、気持ちの穏やかな武人なのだ。室町時代以後は特にこうした特徴が顕著に見られるようになる。そうして、『平家物語』のような叙事的文学のなかの一人物から、『義経記』のような物語の主人公になるにつれて、『平家物語』のなかにすでに芽生えていた彼の王朝的・貴族的側面だけが一方的に強まっていた。このことは、とりもなおさず、武士社会とは言え、文化面においては依然として貴族の影強力が強かつた。いかにも室町時代的な義経の証明とも言えよう。そして事実、謡曲などにあつても、『平家物語』よりは『義経記』に取材したものが圧倒的に多いのである。『義経記』を読んでいると、意図されている同情心というのを強く感じる。先にも述べたが、読ませる・見せるといつた作為的な効果を思はずにはいられない大衆性があるのである。物語の主題を、義経の悲劇性に絞つたところも見事な炯眼である。義経の人生は、極端に明と暗がはつきりしている。彼や彼に関わる人々にまつわる逸話が多い。そして更に悲劇性の強調である。そのどれもが人々の同情心を引き出すに足るものであり、「判官鼻肩」の語を生むに至る。その悲劇性の強調において、彼がすばらしい奇襲の天才であつたことは逆効果である。荒々しいさや田舎臭さは不要なのだ。このような悲劇の主人公は、またとびきりの美しさをも同時に備えていなければならぬ。義経の容姿端麗は、人々が要求する悲劇性の

条件として、必然的に生まれたものである。こうして、美化・デフォルメが進み、物語の中に生きる義経像が生まれる。

更に私は、『義経記』にみる義経の魅力に、不完全さ・柔弱さを挙げたいのである。巻一から巻四までの義経は、牛若丸伝説の流れをくんで、利発で早業や武芸に勝れた男子であり、登場場面の悉くに華を感じさせる。が、巻五からの義経は優柔不断で、失敗も多く、覇気というものがなくなっている。すっぱりとした決断力を欠き、部下の面々に歯がゆい思いをさせるかと思うと、不審な人物をすぐに信用してしまつて弁慶を慌てさせたりする。ただ、その弱さの見られる義経の台詞に興味深いものが多く、お伽話のような前半に比べ、没落を描く後半の方が、物語として読ませるように思われる。一思いに出家してしまえば、彼も彼の周囲の人々も、生き伸びる確率は大きかつたらうに、義経の胸中を去来するものは何だつたのだろうか。それほどに言われのない罪が悔しかつたのであろうか。逃げ落ちる先に再び栄花が待っていると思つたのであろうか。そうしたことをあれこれと思わせるのである。義経が凡庸な男になつてゆく程に、「判官最良」の感情が高ぶるのを覚える。義経を取り扱つた歌舞ものには、義経を助け、かばう人々を中心で、義経自身が主役でないものが多い。が、義経は脇役のように見えて、実は舞台の要である。このことが『義経記』にも言えるのではないかと思われる。あらゆる犠牲・献身の上に成り立つた義経は、やはり、「判官最

良」のエネルギー源なのであり、常にその象徴的存在として、伝説の中に君臨しているのである。

義経は史実の上からも充分に悲劇的英雄である。が、他の人物関係と公平に並べて見れば、義経のみが不当な扱いを受けたわけではなく、また義経のみが正義の立場にあつたわけでもない。私の最初の基本的指標も、現代的「判官最良」解釈に異論を唱えたところから始まつたのだが、結局、私も史実に囚われて一人だつた。『義経記』を読んで、「判官最良」の感情が、単純・素朴であることに気づいた。余計な詮策の関与しない、明快至極な感情である。思う存分肩入れしてよいのだ。つまり、本来の「判官最良」には客観的視点は不要なのである。そこには、悲劇の英雄義経への同情と愛情のみ存在し得る。『義経記』は単なる空想の産物、虚構の物語ではない。史実に立脚しつつ、時間的な流れと、地域的な拡がりのうちに、自ら伝説が伝説を生んだ歴史小説である。そして、そこに描かれている義経像は、凛々しい武者ぶりは前半に少しあるだけで、むしろ、後半の優柔不断で平凡人と変わらない義経を描くことに力点が置かれていた。一人の英雄が、無力な一人の男と化してゆき、彼を支える弁慶や静などと交わされる細やかな情愛をオーバーラップさせることによつて、更に悲劇性を高めてゆく。『義経記』は、悲劇的な英雄の追憶の記録として、人々の心の中に深く根ざすやさしさや、思いやりなどを触発し、「判官最良」の語を生み出した。『義経記』に見られる魅力として、登場人物の一人一人に強いキャラク

ターを与えたきめ細やかさなどよりもまず、この、隅々に
こめられた義経への人々の哀惜の情を認めるべきなのでは
ないだろうか。

参考文献

『義経記』

日本古典文学大系 37 岡見正雄校注 岩波書店

『義経記』 1・2

東洋文庫 114 佐藤謙三・小林弘邦訳 平凡社